「多様な学びをいかに保障するか？」 ～「夢見る小学校 完結編」上映会およびシンポジウムを終えて～

2026 年 1 月 21 日、「夢見る小学校 完結編」の上映会およびシンポジウムを開催した。当日は地域の一般参加者や学生を中心に 43 名が参加した。本企画は、多様な子どもたちが生き生きと学び、安心して過ごせる居場所をいかに保障していくか、という課題意識に基づき実施されたものである。筆者は長年、障害児教育に携わる中で、こうした視点の重要性を痛感してきた。

オオタヴィン監督による「夢見る小学校」シリーズは、子ども一人ひとりの主体的な学びや、映像を通して、多様性を尊重する教育の在り方を提示してきた。これまでにも同スタッフによる「夢見る小学校」「夢見る校長」の上映会を開催してきたが、参加者は年々増加している。今回上映した「完結編」では、小学校時代に自由で探究的な学びを経験した子どもたちが、中学校進学後も自ら学び続け、生き生きと学校生活を送る姿が描かれていた。

本企画の主旨は、文部科学省の学習指導要領が 2020 年度より「探究的な学習」を重視する方向へと大きく転換したことを踏まえ、30 年以上前から探究学習を実践してきた先進的な事例に学ぶことにあった。映画では、学校が本来持つ学びの楽しさや可能性が具体的な授業風景を通して示されており、既存の「学校教育」観を問い直す契機となる内容であった。今回は特に、「多様な学び」をより具体的に検討する場としてシンポジウムを構成した。

シンポジウムには、多様な学びを実践・推進する立場から、以下の 4 名をシンポジストとして迎えた。日本初の公立小中一貫の不登校特例校（学びの多様化学校）の基盤づくりに携わった白石市の山田市長と半沢教育長、太白区で私立の不登校特例校「ろりほっぷ小学校」を運営する高橋校長、そして不登校の子どもたちの学習支援を行う「相談・まなび塾」塾長の阿部氏（元仙台市教育長）である。

映画上映後の討論において、高橋校長からは、子どもに「自由と責任」をいかに身に付けさせていくかについて、教師や保護者による「子どもへの信頼」を基盤とする教育観が示された。阿部氏からは、地域全体で子どもを支える仕組みとして、公民館等の地域施設を学校に代わる「学びの場・居場所」と位置付け、学校と連携することで出席扱いとする構想が紹介された。

半沢教育長からは、白石市の不登校特例校「希望学園」に現在 40 名の児童生徒が在籍し、そのニーズが年々高まっている現状が報告された。また、同学園での公開授業や体験学習が市内教員の研修機会となり、多様な学びの実践を広げる契機となっていることも示された。山田市長からは、東北地方において同様の公立校が本年度新たに 2 校設置予定であることに触れ、こうした取り組みの広がりに期待が寄せられた。あわせて、自身の生育歴を背景に「すべての子どもに学ぶ楽しさを保障すること」を市政の理念としていること、教育予算の拡充は将来への投資であるという信念が語られた。

本企画は、本学の健康栄養学類・東門田教授、こども学類・相馬教授、学校教育学類・竹内講師、人文学類・パトリック准教授、中山教授との協働により実施された。尚絅学院大学および地域社会にとって、多様な学びの在り方を考える上で極めて意義深い機会となった。今後も「多様な学びの保障と発展」を共通テーマに、学内外の関係者とともに検討を深めていきたい。

文責：心理学類　三好敏之